様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月　 ６ 日現在

機関番号：１４４０１
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ１３０６９

研究課題名（和文）ライフヒストリー法の革新－UMLによる記述－

研究課題名（英文）Inovation of life history method: UML description

研究代表者
川端　亮（Kawabata, Akira）

大阪大学・人間科学研究科・教授

研究者番号：００２１４６７７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究においては、私たちのグループは、UMLを用いて、宗教の体験談を図示する方法を開発した。Enterprise Architect13というソフトウェアを用いて、既に教団誌に発表された体験談や、これまでメンバーが聞き取ってきた体験談を、クラス図とステートマシン図によって示した。
日本社会学会大会で、「ライフヒストリーの図式化の試み」と題して、その成果を報告した。また、学術論文としてもその成果を発表した。さらにこのUMLによる体験談の図示をもとに、宗教体験談を聞き取る項目を検討し、インタビューガイドを作成した。そのガイドに従い、インタビュー調査を実施した。

研究成果の概要（英文）：In our study, our group developed a method to show religious experience stories diagrammatically using UML. Using the UML software called Enterprise Architect 13, we showed testimonies that were already published in the magazines and that we have interviewed so far through class diagrams and state machine diagrams.
At the annual meeting of the Japan Sociological Society, we reported the results of our study titled "An attempt to put life history into the form of diagrams." In addition, an academic paper was published. Based on the diagrams of the experience stories by UML, we examined the question items to hear religious experience stories and organized an interview guide. Following that guide, we conducted an interview survey.

研究分野：社会学

キーワード：ライフヒストリー法　宗教的体験談　UML　クラス図　ステートマシンズ

１．研究開始当初の背景

（１）1977 年の中野卓『口述の生活史』以来、語られた人生をデータとする研究（ここでは広くライフヒストリー法とよぶ）が復興し、1990 年代には、『ライフヒストリーの社会学』(1995)、『ライフ・ヒストリーを学ぶ人のために』(1996)などの教科書の出版も相次いだ。近年はアクティヴ・インタビュー（ホルスタイン・グブリアム 2004）や桜井厚の対話的構築主義（桜井 2002 など）が注目を集め、社会調査の一つの方法として、非常によく用いられている。

ライフヒストリー法は、基本的には、特異、あるいは典型的とされる個人の生活史を対象とし、そこから少しでも普遍性のある理論を構築しようとする。典型的要因から仮説索出を目指す方法（谷 1996）やライフストーリーにモデル・ストーリーを見いだし、マスター・ナラティヴとの関係を分析する方法（桜井 2005）などが考えられているが、複数のライフヒストリー全体を比較する有効な方法は未だ見いだされていない。

人の人生を構造化し、比較して普遍的な社会問題を抽出しようとする研究の一つとして、見田宗介の新聞の身の上相談の分析（1984）があるが、これは解釈の恣意性が高く、すばらしい結果であるが誰もまねができない職人技となっている。また、ライフヒストリーを有向グラフに表す comparative narrative（Abell 1987）の方法も同じく普遍化を目指した方法であるが、推論とグラフ理論を用いる独自の記述方法のため、他の研究者には、受け入れがたいと思われ、出版から 30 年近く経つが、この方法を用いた研究例はごくわずかである。

このようにライフヒストリーを構造化してモデル化しようという試みは、過去にも試みられたが、誰もが使える標準的な方法ではなかったため、現状では多くの研究者には普及していない。

２．研究の目的

本研究では、ライフヒストリーに構造を仮定し、ライフヒストリーは、いくつかの過程から構成されるものと考える。本研究では、ライフヒストリーの構造を記述するために、comparative narrative のように新たな記述方法を考案するのではなく、UML（Unified Modeling Language）という世界標準の方法を利用し、誰でも利用できる調査分析法の一つとして確立する。UML は、情報科学やシステムの現場では広く利用される世界標準言語であり、利用ノウハウは広く蓄積されている。また、ソフトウエア開発だけで使われるのではなく、さまざまな工程を管理したり、あるいは物語を記述することができ、その用途は広い。さらに UML は、世界中で使われているので、図示のためのツールは容易に入手でき、操作も簡単で文系出身のサラリーマンもビジネスで利活用しているものである。この世界標準の UML を用いて、インタビューデータを図示・記述する。これによって、個別事例の記述にとどまるケースが多い半構造化ライフヒストリー法の分析が改良され、複数のライフヒストリーを統一的に図として記述することで、相互に比較し、共通点や相違点を見いだし、普遍化できるモデルを構築することが可能になる。このように本研究は、UML を用いてライフヒストリーを記述し、普遍的モデルを構築する調査方法論の研究である。

３．研究の方法

平成 27 年度

27 年度は、2 ヶ月に１回程度、研究分担者と研究会を開催し、ライフヒストリー法の検討を重ね、本研究のアイディアを具体化した。

まず、研究代表者と分担者がこれまで研究してきた宗教学、宗教社会学の典型的な入信過程の理論的研究を検討した。古典的な研究は、W. ジェームズ（1936）の「急激な回心」と「穏やかな回心」の分類やそれを検討した井上・島薗（1985）、アメリカの新宗教における入信過程の研究として Lofland=Stark モデル(1965)とそれを検討した伊藤（1997）があり、それらの理論の適用範囲の限界を検討した。

ライフヒストリーを時系列として見たときの構造に関する研究は、ウラジーミル・プロップの『昔話の形態学』（1928）以来、試みられている。宗教社会学では、ラボフ（1972）が、要約、オリエンテーション、事態の紛糾、評価、結果、結びの 6 つの部分から個人的な体験談は構成されるとし、これをもとにアンダーソン（1994）は、日本の 3 つの新宗教（善隣会、立正佼成会、崇教真光）の体験談を分析し、要約、オリエンテーション、危機、改善過程、不和、解決や和解、結びの７つの段階があるとした。この 7 つの段階は、信仰に限られるものではなく、多くの人の人生を語る要素となるものである。したがって、ライフヒストリーをいくつかの段階・過程として捉え（時系列構造）、その構成要素の過程のそれぞれに、それぞれの人の人生上での意味が載っているもの（意味構造）と考えることも可能であるとの結論に至った。

さらに、宗教社会学、宗教学の研究をベースにした本研究の「時系列構造」と「意味構造」からなるライフヒストリーという考え方に基づいて、ライフヒストリーをいくつかの過程に分割するその分割方法をある程度、明確にできた。

以上のようにして、体験談は、いくつかの状態が移り変わるものとして定義した。いくつの段階かは難しいが、数が多いと扱いが困難なので、便宜的に３～４段階に区別することとした。ライフヒストリー研究ではしばしば問題となる、事実と認識の違いをどのように示すか、という議論の結果、ステートマシ

ン図は認識を扱うにしてもある時点の認識に基づいた状態の変化を示すものなので、体験談のように認識の時点が異なると、事実の認識も異なるような場合があり、またそのように異なること自体に大きな意義がある場合には、それを使用することはふさわしくない可能性が示された。

そこで、認識の変化はオブジェクトのクラスの変化として示すのが適当ではないかという仮説に基づき、体験談をクラス図でとらえる方法が検討された。

また、一方で体験談のテキストと信仰要素の関連を示すために、質的データの分析ソフトの利用の可能性も探究した。質的データ分析ソフトは、UML と比べるとシンタックスが単純で、関係や操作を示すシンタックスが簡単に利用できないなど、短所があることが分かった。ただし、UML では記述の具体的なポイントを指し示すことが困難なため、記述の部分を示すためには質的データソフトを利用し、その結果を表形式で出力し、UML に読み込ませて、より複雑な関係を示すようにするなど、両者を連結する利用方法もさらに探求していくこととした。

平成 28 年度

2 人の研究分担者に加え、このテーマに関心のある研究者 1 名とも共同して、6 回の研究会を開催した。検討内容は昨年度に引き続き、UML で体験談をいかに図示するかについてである。UML にもさまざまなツールがあるが、27 年度に引き続き、クラス図、ステートマシン図を中心に検討し、宗教的体験談を表すに際しては、クラス図とステートマシン図が適切であろうという結論に達した。

そして、さまざまな体験談の中で、これまでの教団の発行する機関誌などに取り上げられた 5 つの体験談を例として、クラス図の属性、操作を絞り込んでいった。この作業を行うに際して、当初は UML のツールを astah*community 7.0 を使用していたが、より機能の優れた Entrerprise Architect12.1 を購入し、これを用いて作業することとした。そのために科研のメンバーが全員で、Entrerprise Architect12 の初級の講習会に参加し、その機能について、講習を受けた。

これらの経緯を経て、Entrerprise Architect でクラス図、ステートマシン図によって、宗教的体験談のモデルケースを記述できる原型を検討していった。

これらの検討とともに、体験談について、何が重要であるかという議論を行ってきた。宗教的体験談については、認識や意識が変容することが重要であり、その変容のパターンを考えてきた。認識が変容することが、クラス図の属性の一部が変化することであり、どの属性の変化を捉えるべきかが議論された。また、有意味な変化はステートマシン図でどのように示されるべきかについても議論がなされ、とくにトリガーについて、検討が行われた。

以上の点を踏まえて、宗教的体験談のモデル化が進められた。

平成 29 年度

引き続き 2 人の研究分担者に加え、このテーマに関心のある研究者 2 名とも共同して、UML で体験談を図示する方法を検討した。ソフトはバージョンアップされた Enterprise Architect13 を用い、メンバー全員で上級の講習会に参加し、より高度な使用方法とデータの共有方法についての講習を受けた。これらの成果を活かして、既に教団誌に発表された体験談、これまでメンバーが聞き取ってきた体験談をクラス図とステートマシン図による図示を行った。

その成果は、日本社会学会大会で、「ライフヒストリーの図式化の試み」と題した共同報告を行い、4 つの発表を行った。宗教研究に限らず、ライフヒストリー法の研究者から、まだ研究途上ながらも好意的な評価をいただいた。

さらにこの UML による体験談の図示をもとに、宗教体験談を聞き取る項目を検討し、インタビューガイドを作成した。これまでの半構造化インタビューは、十分に構造化されておらず、そのため、多様なインタビューの比較が十分に行えないという欠点をもつ。それをカバーするために、UML で図示し、比較検討ができるように、宗教的体験談において聞き取るべき項目を整理したものである。

一方で宗教意識の特性と体験談の関連について、インターネット調査の結果に基づいて、検討した。その結果は、海外の学術大会で参加者と議論をし、アメリカ人研究者 3 人の関心を引き、今後の研究協力について、依頼した。さらに宗教意識の研究に基づいた情報収集のための Web サイトを開設し、このサイトを通じてインタビュー協力者を募集した。応募していただいた協力者に対して、検討したインタビューガイドを用いて、メンバー全員で 9 月に 6 人、2 月に 7 人のインタビュー調査を実施したほか、各自でもインタビューを行った。これらのデータを UML で図示するべく、分析を続け、さらに研究を発展継続させている。

４．研究成果

(1)研究成果は、宗教的体験談をクラス図とステートマシン図で表記できたことである。

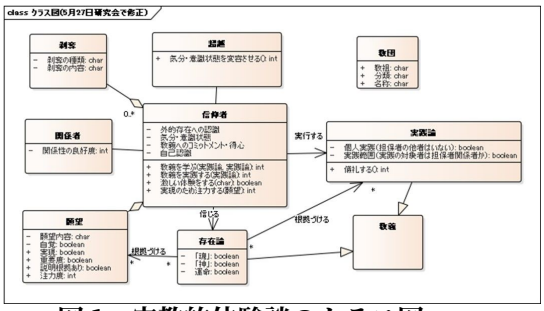

図１　宗教的体験談のクラス図

図１のクラス図によって、信仰者と関係者や願望、剥奪状況との関係を示すことができる。

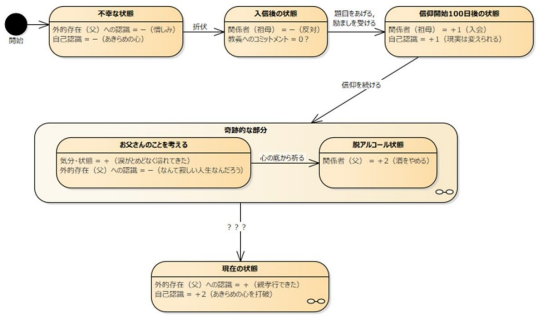

図２　宗教的体験談のステートマシン図

宗教的体験談は、まだ統一的なステートマシン図に表せるほど抽象的なモデル化はできていないが、個別の宗教的体験談はステートマシン図に表すことができる。このステートマシン図は、奇跡的な御利益体験によって、自己の内面が大きく変化した状態の遷移を表すもので、そのような遷移を示さない体験談との違いが明らかにできた。

同様の方法によって、入信しても信仰が深まらずそのままの状態で続く遷移図、脱会する遷移図、逆に信仰が深まる遷移図も検討し、入信から信仰が深まる過程についての知見を蓄積した。

(2)研究成果の 2 つめは、検討してきた状態遷移図に基づいて、信仰を過程として捉えるインタビューにおいては、尋ねるべき質問項目がかなりの程度明確となり、質問項目を文字通り半構造化することができたことである。個人特性、経歴の概略を語っていただいたあとに、出身地、両親の信仰、子どもの頃の宗教や受けた教育、家庭教育、結婚や子供の様子、入信の時期やきっかけ、入信後のよかったこと、社会的ネットワークの種類と量、教団内での役職、改宗の有無、人生でうれしかったこと、困難であったこと、これまでの苦難や願望とその解消、奇跡の経験、意識や認識の変容、挫折や日常の実践などについてである。

これらをパワーポイントにまとめ、それをプロジェクターで映しながらインタビューを行い、スムースにインタビューを進めることができた。これはインタビュー法としては大きな成果である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）

猪瀬優理、2018 年、「ライフヒストリーの図式化の試み――信仰の維持と離脱の過程」『龍谷大学社会学部紀要』52 巻、46-58（査読なし）。

〔学会発表〕（計　　件）

河野昌広、2017 年、「ライフヒストリーの図式化の試み（１）――UML による革新――」第 90 回日本社会学会大会。

猪瀬優理、2017 年、「ライフヒストリーの図式化の試み（２）――信仰の離脱と継続の過程――」第 90 回日本社会学会大会。

川端亮、2017 年、「ライフヒストリーの図式化の試み（３）――体験談のおもしろさ――」第 90 回日本社会学会大会。

渡邉光一、2017 年、「ライフヒストリーの図式化の試み（１）――『口述の生活史』における人間類型の分離比較と主観的合理性の定式化――」第 90 回日本社会学会大会。

〔図書〕（計１件）

川端亮・稲場圭信、2018 年、『アメリカ創価学会における異体同心』新曜社

〔産業財産権〕なし

〔その他〕

ホームページ等　　なし

６．研究組織

(1)研究代表者

川端　亮（KAWABATA, Akira）
大阪大学・人間科学研究科・教授
研究者番号：00214677

(2)研究分担者

渡邉　光一（WATANABE, Mitsuharu）
関東学院大学・経営学部・教授
研究者番号： 30329205

猪瀬　優理（INOSE, Yuri）
龍谷大学・社会学部・准教授
研究者番号： 60455607

(3)連携研究者　　なし

(4)研究協力者

弓山　達也（Yumiyama, Tatsuya）
東京工業大学・リベラルアーツ研究教育院・教授
研究者番号：40311998

河野　昌弘（KONO, Masahiro）
関東学院大学・経営学部・非常勤講師
研究者番号：なし